

(様式1)

教育研究業績書		
2022年 5月 1日		
氏名 荒木美千子		
研究分野	学 位	
看護学	東洋大学大学院 社会学研究科 福祉社会システム専攻 (社会学修士)	
研究内容のキーワード		
老年看護学、リハビリテーション看護学、臨床看護学		
教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
1 障害をもつ高齢者とその家族による特別講義学習	平成18年4月1日～平成20年3月31日	東京医療保健大学医療保健学部看護学科の「臨床看護援助論Ⅳ（リハビリテーション看護論）」の科目において、脳卒中により右片麻痺をきたした高齢障害者とその家族による特別講義を実施し、その後、グループワークを行い、リハビリテーション看護の中の障害者心理の授業内容の充実に努め成果を得た。
2 作成した教科書、教材 1 「誤薬事故」の台本	平成8年4月1日～平成9年3月31日	東邦大学医療短期大学看護学科3年生を対象とした「成人看護学実習Ⅰ（急性期）」および「成人看護学実習Ⅱ（回復期）」の科目において、看護学生が医療事故に対する認識を深め、看護者の責務について理解できるように作成した「誤薬事故」の台本を用いた役割演技シュミレーションによる学習方法を考案し、研究的な取り組みを行った。実際の学習評価では、演習に対して83%の学生は、「実際に観る、演技することで状況が把握しやすく、自分のこととして考えられた」と答えており、また、演習したことで72%の学生がその後の実習に役立ったという肯定的な感想が多かったなど、成果が得られた。
3 教育上の能力に関する大学等の評価 特記なし		
4 実務の経験を有する者についての特記事項 1 埼玉県総合リハビリテーションセンター看護研究指導講師	平成26年6月～現在	埼玉県総合リハビリテーションセンターにおいて3病棟および外来の看護研究指導講師を担当している。
5 その他 特記なし		
職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1 資格、免許等 1 看護師免許	昭和62年5月	
2 所属学会 日本看護研究学会、日本応用心理学会、日本看護科学学会、日本老年看護学会、日本リハビリテーション看護学会		
3 実務の経験を有する者についての特記事項 藤沢市民病院勤務	昭和62年4月1日～平成4年3月31日	看護師として呼吸器内科・外科、眼科、神経内科、循環器内科、腎臓内科等の混合病棟に勤務した。
4 その他 特記なし		

(様式2)

研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
(著書)				
1 看護実践のための根拠がわかる 老年看護技術	共著	平成27年 1月	メヂカルフレンド社	高齢者の多様で複雑なニーズに応える看護実践能力の獲得のために基盤となる技術書である。看護技術の中身である具体的な直接行為の細部について、方法・留意点と根拠を示しながら、「看護技術の実際」で写真やイラストを多く入れてわかりやすく提示しているのが特徴である。担当は、高齢者への生活行動援助のための看護技術の「からだを動かす」であり、高齢者のからだを動かすことの意義と看護援助の目標から適切な運動ができるようにするための看護援助まで執筆している。A4判 全323頁 本人担当部分：p. 137-p. 146 編者：泉キヨ子・小山幸代 共著者：シェザード檜塚まち子、千葉京子、蛭名由加里、本間礼子、菅原峰子、荒木美千子他
(学術論文)				
1 老年看護学実習における事前に提出された受持ち患者情報を活用した演習取り組みの効果—受持ち患者情報から見つける看護の視点— (査読付)	共著	平成24年 5月	日本赤十字秋田看護大学紀要・日本赤十字秋田短期大学紀要 第17号	老年看護学実習を終了した学生を対象に①演習直後の学びや気持ちの変化と②実習終了後に演習が実習全体にどう活かされたのかや気持ちの変化についての記述を求め分析した。その結果、＜イメージすることにより広がる看護の視点＞など6つのカテゴリーが抽出された。実習初日、病棟に行く前に受持ち患者の状況や援助場面を具体的にイメージし、実践できたことは、対象理解に留まらず、実習に向けての心の準備や原動力となったといえる。演習の成果として、演習の目標は概ね達成されたといえるが、対象である高齢患者のリアリティを高めていくなど演習環境を整える必要性が示唆され、今後の課題といえる。 本人担当分：共同研究につき本人担当部分抽出不可能 論文掲載：p13-p22 共著者：佐藤美恵子、荒木美千子、佐藤サツ子
2 高齢者への摂食・嚥下演習を取り入れた口腔ケア演習の学習効果 (査読付)	共著	平成28年3月	帝京科学大学紀要 第12巻	摂食・嚥下機能障害を有する高齢者の口腔ケア技術における学内演習の効果を評価する目的で演習の自己評価レポートおよび学びの内容を分析した。看護師役の学びでは、「自分と対象者の体位整える必要性」を認識し、実施前の舌の運動やマッサージなど「手順を踏んで身体の食事への準備を整える必要性」などを学んでいた。高齢者役をとおした口腔ケアの学びとしては、＜頭部支えてもらおうと安定することの理解＞や＜転倒の恐れもあるので支えてもらうことの重要性＞を感じ、「自分と高齢者の体位を整えることの重要性」について学んでいた。今後は、3年生の後期から開講する老年看護学実習において、口腔ケアや摂食介助ケアをどのように展開できるのか、授業と実習の連動について明らかにしていくことが必要である。 本人担当分：共同研究につき本人担当部分抽出不可能 論文掲載：p181-p188 執筆者：堀之内若名、高田大輔、泉キヨ子、荒木美千子、山田正巳